

五、まとめに代えて

安 世舟

東アジアにおける国際秩序について、我々主催者が考えたのは、二十一世紀におきまして二十年後ぐらいに、どういう新しい国際秩序が生まれるんだろうかということでしたが、今日のシンポジウムでは短期的な分析で終始しました。フロアから三人ぐらいの人が質問というより意見として書いておりまして、日本が今、経済大国としてアジアの他の国々と経済的に緊密な関係を結んでおり、したがって、EUと同じように東アジアにおいても経済共同体を作って、そのうえに政治共同体としてEUのようなものを作ればいいじゃないかというご意見がありました。

歴史は大体一世代、ないし二世代で変わります。ソ連のような強国がいわゆる七十五年で崩壊してしまっているわけです。ナチス・ドイツだって十二年で崩壊しているんですよ。ですから、今のこの体制が、十年、二十年後を考えると、私はかなり変わっているんじゃないかと思っております。今日の話を伺いますと、どうも北朝鮮が問題児であると思われまます。これは、暴れん坊で駄々をこねているという感じなんです。したがって、この北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国をいかにして、今後この東アジアの新しい国際秩序に組み込んでいくのか、ソフトランニングと言いますか、これが日本・韓国・あるいはアメリカ・中国の現在の政策であるということが、だいたい結論と言えるのではないかと思うんですが、それ以上の案がないということなんです。先ほど岡村先生が、「核の傘から情報の傘」ということをご指摘なさっていたんですが、私は、これは別の観点から考えております。と申しますのは、私は、ドイツの専門家でありまして、東西ドイツの統一からソ連の崩壊等について詳しく研究しております。

今から私も二十年前、西ドイツのマンハイム大学に客員研究員で滞在している間、二、三週間東ドイツ等に滞在したことがあります。東ドイツでは、西のテレビが全部入っているんですね。ということは、ヨーロッパにおきましては、西側は東欧圏に対して言論の自由、いわゆる人民民主主義と彼らが主張しているから、民主主義は言論の自由がなくちゃいけないんじゃないかと主張し、それを受け入れさせて、ソ連でも、やむをえずこの電波の自由と申しますかテレビを見ることを許しちゃったんですね。そして、一般民衆は、テレビを見ているうちにどうもおかしさと感じるようになり、ソ連は天国だというけれど、実際はそうじゃなかったという形で崩壊したんですね。

ですから、今、北朝鮮がこの「情報の傘」の中にもし入るんならば、いわゆる一般民衆が、いわゆるこの日本及び韓国のいわゆるテレビを含めて情報を知るとなると、今の体制はすぐ消滅してしまうと思うんですよ。

そのためにどうしたらいいかという問題です。日本は現在、軍事力を用いるんじゃないやなくて経済力を用いて世界の平和に貢献しようとしています。今、村井先生のご指摘のようにあまり効果がないということなんです、シベリアンパワーとして、北朝鮮の経済を世界経済に組み入れるように経済援助などの方法を用いるばかりでなく、さらにこのいわゆる言論の自由といえますか、民主主義を広めていくといえますか、そういう形で、むしろこの北朝鮮が一瞬のうちに消えて無くなるようにすることも考えるべきではないかと思うんですね。そうしますと、北朝鮮が無くなりますと、アメリカ軍が日本に駐留する意味も無くなってしまおうという形で二十年後は、また別の世界が現れてくるんじゃないかとも想像できます。

それから、最後に、村井先生のご指摘は、大変貴重で目から鱗が落ちるような思いを致しております。と申しますのは、ドイツ語で政治という言葉には二種類、つまりグローセポリテイークとクライネポリテイークという二つの言葉があり、それを、訳すると大政治と小政治となります。どの国も二つの政治を行うわけです。大政治は外交

と戦争です。最終的にはですね。それから小政治というのは、国内の様々な利害を調整していくということですね。日本は、戦後、憲法で国策遂行の手段として戦争を放棄したんですね。ですから、他の国と違ってこの大政治は全部アメリカに任せてしまったんです。ですから、日米安保体制下の日本という国の政治をよく見ようとしますと、日米安保体制と日本国憲法が二つ一緒になっているんですよ。この一体となっている状態を全体的に見なくてはならないんですね。ところが、日本の国内においては、日本国憲法しか見えて来ないんですよ。日米安保体制というのは、国策の遂行の手段として戦争の部分なんです。これは当然なんです。そういう観点から、村井先生はものを見ていらっしやる。日本は、大政治をアメリカにまかせてしまっておりまして、それが無いものですから、いわゆる戦略もなければ戦術もないし、国家目標もないんです。今現在ですね。そうしますと、日本が経済大国にふさわしいように政治大国になるということは、つまり「普通の国」になるということですが、それについて、アジアは非常に警戒しております。歴史の問題がありましたね。

そうしますと、この日米安保体制のもとで、将来日本がアメリカとどのような関係を二十年後築いていくかという問題は、二つあると思います。一つは、日本が、小沢さんが言うように「普通の国」になるということですね。ということは、軍事大国になるということですね。いわゆる国策の遂行の手段として戦争、北朝鮮みたいに外交手段として戦争をちらつかせるという方向です。昔かつて日本がやりました。ということをやるのも一つの国家目標ですね。あるいは、そういうことはやらないで、どう経済力をバックにして政治大国になりうるのか、これは非常に大変難しい問題だと思うんです。そうしますと、日本が軍事大国として、もし、政治と軍事が一体的関係がありますので、そういう方向へ、もしいったならば、果たしてアメリカが許すだろうか、あるいは日本近辺のアジア諸国、とりわけ中国が許すだろうかという問題があるわけです。

したがって、これからの二十年間に日本とアメリカの関係が、北朝鮮問題が新しい国際秩序のもとで解決された後に、どうなっていくかという問題は、EUを展望しながら、今後国際政治の大変重要な問題になっていくんじゃないかと思えます。

言うまでもなく、本来ならば、今日、そういう問題も含めてディスカッションして頂きたいと思つたんですが、時間が足りず、すでに予想した時間も十五分過ぎております。

したがって、以上のようにとりとめのないまとめということになりましたが、これをもって終わらせて頂きますが、その前に今日のこのシンポジウムに参加して頂きました諸先生方、通訳をして頂いた諸先生方に、研究所を代表して心から感謝を申し上げます。それと同時に、四時間半という長い間にわたって静聴して頂きました皆さんのご支援によりまして、国際比較政治研究所第二回国際シンポジウムが、このように盛大に首尾よく終わることが出来たことに対して、所長として深く感謝する次第であります。

本当に皆様ご静聴ありがとうございました。